本会元理事長　鎌田元一先生を偲ぶ

本会の元理事長、鎌田元一先生は、二〇〇七年二月二日、肺癌のため逝去された。享年六〇歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は一九四七年一月大阪市にお生まれになり、府立住吉高校を経て、一九六五年京都大学文学部に入学、一九六九年に史学科国史学専攻を卒業された。引き続き大学院に入学され、一九七一年に修士課程を修了、一九七四年に博士課程を終えられた。同年四月から日本学術振興会奨励研究員として勉学を続けられたが、一二月に富山大学文理学部講師となり、一九七七年に同大学人文学部助教授、一九八三年には京都大学文学部助教授に就任された。さらに一九九五年教授に昇任し、二〇〇二年に博士（文学）を授与されたが、停年を待たずして現職のまま逝去された。

先生の御専門は日本古代史で、恩師岸俊男先生の学風を受けつぎ、緻密かつ犀利な実証的論考を次々に発表され、古代史研究に堅固な基礎を築かれた。御研究の内容は多方面にわたるが、最も力を注がれたのは、律令公民制に関する研究である。日本古代史を理解する上では、律令体制の成立過程と構造を知ることが肝要であるが、人民と土地を一元的に支配する公民制はその中核をなす制度であり、鎌田先生はまさに日本古代史の最重要問題に対して、真正面から挑戦されたのである。特に刮目すべきは部民制研究である。先生は大化前代の部民制が倭王権による全国支配システムであり、王族・豪族の「カキ」所有と「ベ」の王権奉仕が表裏一体のものであったことを解明された。また屯倉制についての研究も進められ、律令体制の領域支配の起源をここに求められた。かくして倭王権から律令国家への道程がクリアに提示され、それはそのまま古代史学界の通説を形成している。一方、律令公民制の構造については、計帳・正税帳・田籍など、諸国から京進された公文書の厳密な読解にもとづき、人民・土地支配の実態を明らかにされた。これらの研究は大著『律令公民制の研究』（塙書房、二〇〇一年）にまとめられたが、同書の学問的貢献は高く評価され、二〇〇二年に第二四回角川源義賞を受けられた。

鎌田先生は、古代史料に関する研究も精力的に進められた。奈良時代史の基本史料『続日本紀』の諸写本を収集・検討し、卜部本を軸として写本系統を解明された。茨城県鹿の子C遺跡の漆紙文書調査では、超人的な集中力によって解読に成功された。木簡学会副会長として、出土文字史料の調査・研究に指導的役割を果たされたことも忘れられない。さらに『安祥寺資財帳』の研究では、行方知れずだった唯一の古写本が、あたかも先生の情熱に応

えるかのごとく出現し、縁あって京都大学の架蔵となったが、先生はこれを用いて最高水準の校訂本を作成されたのである。

晩年の先生が最も力を注がれたのが、古代紀年の研究である。倭王権から律令体制にいたる歴史を、実年代を押さえつつ明らかにするためには、紀年論が不可欠の基盤となる。先生は近世以来の研究を丹念に検証しながら、この方面でも新局面を開きつつあられた。それは学生のころ、考古学研究会会長として全力を傾けられた古墳研究と、はるかに響き合うものだったに違いない。しかし、先生の紀年論が大成を見ることはなく、いくつかの重要なトレンチと大局的見取り図だけが私たちに遺された。

鎌田先生は学生・院生を熱心に指導された。その姿勢は厳しく、受業生には史料の一字一句をゆるがせにせず、深くかつ柔軟に、具体性をもって読み解くことを求められた。卒業論文・修士論文の試問では、内容だけでなく、用字や表現の誤りを細かく指摘され、正確な日本語を用いるよう指導された。しかし、単に厳しく教えられただけでは、決してない。先生は一人一人をよく見ておられ、それぞれの個性と成長に応じた指導を心がけておられた。学生たちは暖かいお人柄を自然に感じ取り、安心して伸び伸びと研究に励むことができたのである。

先生が体調の異変に気付かれたのは、二〇〇四年のことであった。放射線照射と化学療法を組み合わせた治療により、豊かな髪をすっかり失われた時は、周囲の者は多大なショックを受けた。しかし、先生は何事もなかったかのように授業を続けられ、会議ではつねに筋の通った御意見を開陳された。私たちは先生がこのまま回復され、御研究を進められるものと信じていただけに、御逝去の報に接して茫然とするばかりであった。

二〇〇八年二月、一周忌にあたって「鎌田元一先生を偲ぶ会」が催され、一五〇名近い知友・受業生が集まり、先生の思い出を語り合った。このとき先生の第二論文集『律令国家史の研究』とともに、追想集『蝶から古代史へ』と遺文集『紫煙の中から』が編まれた。頁をめくるにつれ、悠揚迫らぬ風格をもち、冗談好きで情に厚かった先生のお姿が懐しく思い出される。

鎌田先生の御蔵書は、受業生である劉暁峰氏の尽力によって、すべて中国北京の清華大学に寄贈されることになり、二〇〇八年三月、ユリ夫人の御臨席のもとに寄贈式が行なわれた。また、先生が収集された『続日本紀』諸写本の写真は、一括して京都大学文学研究科古文書室に収蔵された。先生の研究活動を支えたこれらの書籍・史料は、日中両国における日本古代史研究の基盤として、今後永く活用されていくことであろう。先生の御冥福を心よりお祈りする次第である。

（吉川真司　記）